4　黄昏　和田英作

大正三年（一九一四）　油彩・カンヴァス
六四・一×九〇・〇

本図は大正三年の第八回文展に「赤い燐寸」（鹿児島市立美術館蔵）とともに出品された。「赤い燐寸」は伊豆土肥にて渋沢栄一の四男である渋沢秀雄を描いたもので、夏の強い日差しを浴びた帽子に浴衣姿の男が、口にくわえた煙草に火をつけるため燐寸を擦ろうとしながら視線をこちらに向けた一瞬の姿をとらえ、海の青と浴衣の白を基調とした印象派風の外光描写に徹した作品である。それとは対照的に、本図は題名の通り、たそがれどきの農村風景が間もなく闇に沈み込もうとする、そのわずかな時間帯を描いたものである。まず目に留まるのは、まだ明るさの残る空を背景にぼんやりと浮かび上がる木々や民家の屋根などで、右手後方に煙を上げる煙突だけが人々の現実の生活をわずかに想起させる。画面の暗さに目が慣れてくると、手前に広がる野原の中央から右方へとつづく細い道が見え、闇に覆われようとするこの野原の空間的な広がりを知ることができる。その画面の半分以上を占める野原には、あまり目立つものではないが、ところどころに丈の高い細い枝のような木が走り書きのような粗略な描線で描き加えられ、静止したような画面にかすかな動きを与えている。当時の日本の農村ならば、どこにでも見られたような茫漠とした風土を、ことさらに飾ることない筆致でまとめ上げている。画面右下に「WADA EISAKU／1914」と、サインと制作年が記される。

和田英作（一八七四～一九五九）は鹿児島に生まれた。第三回内国勧業博覧会で見た洋画に感銘を受け、はじめ曽山幸彦や原田直次郎のもとで学び、その後、黒田清輝、久米桂一郎の天真道場に入門した。明治二十九年の白馬会の結成に参加、同三十二年から三十六年にかけてフランスに留学してラファエル・コランのもとで学んだ。帰国後は東京美術学校教授、同校長を歴任、帝室技芸員にも任命され、文化勲章を受章するなど、明治・大正・昭和三代の洋画界で重きをなした。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

近代の洋画家、創作の眼差し
三の丸尚蔵館展覧会図録No.52

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成二十二年十月三十日発行

©2010, The Museum of the Imperial Collections